

書誌情報の発達とアフリカ地域研究

武内進一

どの地域を研究対象とするにせよ、ライブラリアンとの交流は研究者にとって必要不可欠である。そして、近年の電子媒体による書誌情報の急速な発展が、研究者とライブラリアンとの関係にある側面で変えつつあることも事実であろう。本稿では、アフリカ研究に取り組み立場から、こうした変化がどのように見えるか、自らの来し方を振り返りつつ考えたい。

●『ベルギー領コンゴ農業会報』

一九八六年に大学卒業後すぐアジ研に入った私は、フランス語圏中部アフリカ諸国特にザイール（現コンゴ民主共和国）の担当を命じられた。それまでアジ研でザイールを担当した研究者はいなかった。当然、日本にもほとんど研究者はいない。私は、右も左もわからぬまま、この西ヨーロッパに匹敵する広大な国について研究することになった。入所を許された面接で、当時の総務部長に「あなたの前にはフロンティアが広がっています」と言われ、その時は武者ぶるいするような気持ちになったことを覚えているが、客観的に見れば、大海原に

丸木船で放り出されたようなものであった。未熟な航海者が沈没せずにここまでやってこられたのは様々な方々に助けていただいたからだ。とりわけ思い出深いのは中村弘光さんである。国会図書館から移籍され、アジ研の書籍整備に尽力された中村さんは、私が入所したとき既にアジ研を退職されていた。それでも、何かにつけ研究所に顔を出され、ご自身がナイジェリアに滞在されたこともあって、アフリカ研究者との密接な交流を続けておられた。そのため私はこの驚くべき博識のライブラリアンに接し、教えを請う機会に恵まれた。「君、あの本知ってる?」、「君、あれ読んだ?」という中村氏の一言は、私にとって羅針盤のようなものだった。ザイール研究の必読文献を中村氏に紹介され、私はそれにひとつひとつ目を通すことから、研究のよちよち歩きを始めたのである。当時アジ研図書館の書誌カードは著者・書名別だけでなく国別・地域別にも配列されており、ザイール関連書籍を探すのに随分助けられたが、中村さんはそうした調べ方では見つけられない研究書もよくご存じだった。

『ベルギー領コンゴ農業会報』(Bulletin Agricole du Congo Belge) のことを教えてくださったのも、中村さんだった。植民地期のザイール（ベルギー領コンゴ）で一九一〇年から独立（一九六〇年）直前まで発刊されたこの雑誌には、植民地（ベルギー領コンゴ、ルワンダ、ブルンディ）の統治に関わる農業省事務官が書いた論文や、農業関係統計資料が数多く掲載され、当時の農業・農村事情を知るための一次資料として極めて重要なものだ。そして、なんとたる幸運か、アジ研の図書館にはそのほとんどが所蔵されていた。私は図書館の書架から研究室に雑誌を運び込み、一夏かけて所収論文の書誌カードを作成した。一日中ほこりまみれの雑誌を繰り、論文タイトルをカードに書き写すのは、肉体的に疲れる作業だった。それでも、植民地期の代表的な雑誌の所収論文をすべて確認しておかげで、当時の農業政策に関する重要論文や農村実態調査資料の所在を把握することができた。この作業は、その後幾つかの論文を執筆する上で、きわめて重要な意味を持った。いわば、それは私に、中部ア

フリカを研究するうえでの基礎体力をつけてくれたのである。

●書誌情報の発達とライブラリアン

時代は変わり、データベースやインターネットを通じて書誌検索が格段に充実した。調べたいトピックについて検索すれば、たちどころに関連資料がパソコンの画面上に現れ、そのうち幾つかは居ながらにしてダウンロードし、印刷することができる。電子ジャーナル、データベース、新着アラートなどは、基本的な書誌情報収集のために不可欠の研究インフラになった。

書誌情報ツールの発達によって、特定の地域やテーマに関する基本文献をすぐに入手できるようになった。以前なら、基本的な文献に辿り着き、手に入れるまでに相当の労力を要したが、そこに至る過程は劇的に省力化された。アフリカの小国についてさえ、一通りの資料は簡単に集まる。

ただし、言うまでもないが、こうした資料収集は万能ではない。現在インターネット経由で入手できる研究情報は、欧米特に英語圏で発信されたものが圧倒的に多く、アフリカ発の研究情報や英語以外の情報は依然として少ない。現在もなお、『ベルギー領コンゴ農業会報』の内容をウェブ上で見ることはできない。

加えて、インターネット情報に関わる信頼性の問題がある。サイトの情報が信頼に

足るものか見極めるには、知識と経験が必要である。自分の研究に関連して、どのウェブサイトに信頼できる情報が存在するかを知るには決定的に重要である。

インターネット上の研究情報に関する知識は、多くの場合、研究者個人々のレベルでアドホックに蓄積されている。ウェブサイトが日進月歩で進化していることを考えればやむを得ないところもあるが、効率がいいとは言えない。研究者はどうしても特定のウェブサイトを集中的に利用する傾向があり、サイトを幅広くチェックする作業には向いていない。

こうした状況下、地域研究者と地域専門的なライブラリアンとの協働の必要性は従来以上に高まっている。インターネットを中心とする新たな研究ツールに関して、有用な研究情報の所在、利用法、注意点など、組織的な知の集積に向けた取り組みは、ライブラリアンが主導して進めることが望ましい。二〇年前の私は、研究情報が乏しいなかで、中村さんをはじめとする優れたライブラリアンに導かれた。今日の課題はむしろ、膨大な情報をいかに処理するかにあるが、そこでもライブラリアンは研究者にとってのナビゲーターとしての役割を担っているのではないだろうか。

●研究者の課題

電子媒体による書誌情報の発達は、アフリカ研究者に大きな利便をもたらす一方、

課題も突き付けている。誰でも一定の地域情報を簡単に入手できるようになれば、地域に特化して情報を集めてきたアフリカ研究者の優位性が崩される可能性があるからだ。

現地で苦勞して集めた情報も、いったん公開すればアクセスは容易である。アフリカ研究に限ったことではないが、研究者の知識が消費されるスピードは、顕著に速まっている。こうしたなか、今日アフリカ研究者は、研究の意義や独自性をどこに求めるのか、そのためにどのような方法を取るべきなのかなど、自らの研究のあり方について従来以上に考えざるを得ない。

その一方で、事態はそれほど変わっていないのかもしれない、とも思う。自分の研究対象地域に関して言えば、地域関連情報量の激増にもかかわらず、一定の水準をクリアした研究の数は依然それほど多くないからだ。入念な文献サーベイによって問題意識を構築し、それをフィールドワークやデータセットを用いて論証したものが優れた研究だということは、昔も今も変わらない。新しいツールによって、文献サーベイは格段に楽になった。つまり、多様な研究の入り口が、より広く開かれたわけである。今日問われているのは、その状況を、それぞれの研究者がどう活かしていくのかという点であろう。

(たけうち しんいち／アジア経済研究所地域研究センター)